

# 1992 SUMMER COURSE IN BIOLOGICAL TIMING に参加して

-----僕を感じたアメリカ-----

名古屋大学 農学部  
長谷川稔

7月15日～8月14日までの1か月間、University of Virginia で”Biological Rhythms Course” が開催された。参加者はアルゼンチン、インド、オーストラリア、メキシコ、日本、アメリカ国内からの人々で、学生数は総勢30名弱であった。僕の1992年の夏はとても充実した季節だった。7月中旬、これから起こる様々な出来事への期待で胸を膨らませながら僕にとって初めての地、アメリカへ向けて出発した。バージニアはアメリカ東海岸の州でワシントンDCの南西に位置している。飛行機に乗っている間から既に気分はすっかりアメリカンで、わくわくしていた。バージニア大学のあるcharlottesvilleは、成田から飛行機を3本乗り継がねばならない大変な田舎町である。JFK空港からのUSairはプロペラ!?のついた飛行機で少々心配ではあったが、native達は当たり前のように乗り込むので僕もそれに習って、不安を胸に秘めつつ平静を装って乗り込んだ。charlottesville空港への着陸は森の中に不時着するかのような景色で、天気が良かった為その辺りの豊かな自然を遠くまで見渡すことができた。Course参加者の宿泊場所は大学の寮であった。寮と言っても日本の国立大学のそれとは全く違い、非常にきれいな煉瓦造りの建物で、1unitが6つの個室と共同のバス、トイレ、ロビーからなり電子レンジ、冷蔵庫が備え付けられており、もちろん冷房もきいている。個室の中にはベッドと机とクローゼットしかなく、到着した日はまだ他の人は誰もおらず時間を持て余してしまった。そして、どんな人々と共同の生活が始まるのか期待と不安でいっぱいであった。次の朝、顔を洗いに出ると昨夜半に到着したらしいアメリカ人とトイレで対面した。トイレでする自己紹介もなかなか味があるものだ……。そんなこんなで、僕のunitの他の5人は全てアメリカ人で、その中にはDr. DunlapやDr. Eskinのlaboの学生もいた。Courseの参加者達は24～30歳ぐらいが主で、中には40歳の人もあり、男性は結婚している人がほとんどで、Ph.Dを持っている人もいた。（僕はまだ独身です。）女性も6名ほど寮に滞在しており、graduate studentがほとんどであった。Summer Courseの内容は午前中に2つのlectureがあり、午後からはlaboでの実習、夜に1つのlectureというのが主なスケジュールであった。laboは3種類（rodents, modeling, electro physiology）があり、どれか1つ希望のものを選択して参加した。modelingはコンピューターを使って時計の仕組みをモデル化する内容でDr. Friesenが主に担当しており、electro physiologyはBullaの眼を使って実験を行っていた（主にDr. Block）。rodents laboはミュータントハムスターを使ってのPhase Shift実験や、

Tcycleの変化のactivityへの影響, SCN lesion, 更に免疫組織化学等の実験であった。(主にDr. Menaker and Dr. Foster) しかし率直なところ内容的には学生実習といった感覚であった。が, laboの大きさ, 設備の充実度など, 日本の大学の研究室では考えられないスケールを実感することができた。この点で午後の実習は僕にとって非常に有効であった。講義は, VirginiaのStaffだけでなくDr. Cahill, Cassone, Eskin, Kay, R. Moore, Page, Silver, J. Takahashi, Turek, Underwood, Young, Zatz, F. Davis, Czeisler etcからのものもあり, CellレベルからHumanまでの幅広い対象におけるcircadian, またultradian rhythmの話を知ることができた。しかし僕にとって何より大きかったのは, 今までpaperで名前しか見たことのなかった人々を自分の目で確かめ, また話す機会が持てたことであった。面白いことにpaperから受けるイメージと, 会って話したイメージが全く違う人もいた。このように, 今回のSummer Courseは僕にとって様々な意味で非常に有意義なものであった。

その他, 今回の訪問で感じたことをつらつらと書いていこうと思う。バージニア大学のBiology Departmentは非常に大きく, 僕が見たDr. MenakerとDr. Fosterのlaboだけでもかなりの数の動物の行動リズムの測定が可能である。とにかくその数と大きさは想像を超え, 驚きの余り開いた口を塞ぐのも忘れてしばらく立ちつくしてしまうほどであった。行動測定を行なっている部屋はだだっ広く, ケージが6個入る横長の木の箱がゆうに50個はあり, チャンネル数にしておそらく300個体以上(噂では約1000個体)の行動リズムが同時に測定できるようになっている。データは全てコンピューターに自動的に取り込まれるようになっており作業の省力化が計られている。また設備も非常にきれいで, かつ充実しており床までもがびかびかにみがかれている。建物内は1年を通じて一定の温度に保たれているそうで, 日本の大学では考えられないほどの良い環境である。それでいてあちこちから歴史(ジェファソン), 文化を感じさせるのである。また情報の交換も活発で, 次々と新しい情報が入ってくる。その環境の中で数人のテクニシャンとlaboの学生達が活発に実験を行なっている。しかし, ここでは夕方6:00を過ぎると人がほとんどいなくなる。これだけ次々とpaperを出すので, 毎日夜遅くまでみんなが活性高く実験しているのだろうと思っていたので少々驚いた。学生達は実験の後, バスケットボールやテニスなどのスポーツをしたり, 友達と飲みに行ったりしているようだ。大学内には, いたるところにテニスコートやバスケットコートがあり, しかも無料で, テニスは2:00a.m.までできる。僕もlectureの後, 様々なスポーツを楽しませていただいた。またこの大学はアメリカンフットボールが強いようで, 数万人も入場できる立派なスタジアムをもっている。これが大学の設備というところがアメリカらしい。大学の敷地は広く, 敷地内にイタリアンレストランやメキシコ料理, バーやピザハウスなどちょっとした盛り場があり, Summer Courseの友達と毎晩のように飲み歩いて色々な話をした。研究の話や各国の話, 将来の夢や恋愛の話など, 時には議論し時には励まし, 1ヶ月の間でとても仲良くなり今でもその交流は手紙etcで続いている。このように色々な

国々のたくさんの新しい友達を得られたことが、ひょっとしたら一番大きなメリットだったのかもしれない。

僕にとってもう1つの収穫は日本以外の人々の生活に初めて触れることができたこと、またそれが僕にぴったりと合ってしまい、楽しくてしょうがなかったことである。その最たるものはなんと言ってもBar-B-Qとビールである。3日に1回は寮で、Bar-B-Qをビール片手にやっていた。その他の日は近くのバーに行きビールを飲むといった生活をしてきた。また昼間ちょっとした時間に芝生の上でフリスビーをしたり、Driveに行ったりと彼らの仕事以外の時間の使い方、人生の楽しみ方に接することができた。あまりに楽しかったので僕は日本に帰ってくるなりBar-B-Qセットを購入してしまった。このようにSummer CourseのProgram以外のところでも色々な事を感じることもできる機会であった。唯一の欠点は、学生の僕にとって決して安いとはいえない額のお金がかかることである。しかしそこにはお金では買えないものが山のようにあった。今回僕はアメリカを初めて訪れたが、話に聞いていた通りの、いやそれ以上の大きさと懐の深さを感じた。

生物リズムの分野においてNSFと日本の交流がますます深まるなか、様々な国際的活動が期待される。今後もこういった機会には進んで参加させていただき、この分野の、また自分自身の活性を高めていこうと思っている。